The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	華人教団特教の人類学的研究
Author(s)	黄, 蘊
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49159
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【13】

氏　　名	黄（コウ）　蘊（ウン）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学　位　記　番　号	第　２１７１３　号
学位授与年月日	平成 20 年３月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学　位　論　文　名	**華人教団徳教の人類学的研究－マレーシアにおける移民と宗教のダイナミズム－**
論文審査委員	（主査） 教　授　栗本　英世 （副査） 教　授　春日　直樹　　教　授　中川　　敏

論　文　内　容　の　要　旨

本論文の目的は、マレーシアで展開を続けている華人教団徳教を取り上げ、その教団展開のプロセスへの考察を通して、移民がいかにして大伝統なる文化要素を用い、自らの宗教を創出してきたのか、またその過程において、人々はどのようにして自身の信仰心にめざめ、自らの宗教観たるものを確立させてきたのかを明らかにすることである。

徳教は、1939 年に中国の潮州地方に誕生した扶鸞（フルアン）という託宣を中心活動とする扶鸞結社であり、戦後潮州系商人によって、マレーシアなど東南アジアの華人社会に伝播し、以来教団的展開を続けてきた。華人の東南アジア地域渡来とともに、これまで数多くの華人教派が伝来されてきた。そのなかで、徳教は、東南アジアに伝播して以後、本格的に教団的展開を遂げたものであり、ローカルな社会において成長してきた教団としての独自性をもつ。

しかし徳教団体は、扶鸞を介した神からのメッセージの獲得や、慈善の展開を主な活動としており、組織性を有してはいるが宗教的修行を含む完全なる宗教制度を確立していない、地域社会に点在する廟と制度化した教派宗教の中間に位置するようなものと位置づけられる。徳教のこうした展開は、移民社会の社会的・宗教的環境や、その担い手となる人々の性格と大きく関係している。徳教の主な担い手となるのは、潮州系を始めとする商人層である。彼らにとっては、宗教理論や制度の構築よりは、宗教儀式や、神に願い事を立てる扶鸞、信仰を介する相互の結合、人的ネットワークの構築こそが重要なのである。マレーシアでは、徳教はこうした商人階層の現実的な需要を背後に、潮州人を中心とする華人社会のネットワークに負いながら、これまで拡大の一途をたどってきた。

本論は、移民による宗教の創出という視点から徳教の生成と展開を捉える。つまり、徳教とその現象を、移民社会の社会状況、そこにおける人々の生き方や思惑に結びつけて究明する。今日の徳教のあり方が、そうしたファクターが交差し、相互に作用した結果であることを明らかにする。なかでも、移民である華人大衆がいかにして出自社会の宗教と結びつき、宗教をどのように主体的に解釈し、またそれを自らの置かれた社会環境に合わせてどのように新たに発展させ、構築していくのかという、これらの過程に注目する。本論は、こうした徳教の事例を通して、これまでの宗教に対する制度の枠組みからの捉え方とは異なる、人々の経験世界に生きる宗教の形態を示すことを目指す。

本論のもう一つの目的は、徳教の担い手である人々の生き方、信仰の有りさまの変化を考察することにある。人々は、様々な現実的な目的をもって徳教団体に参入し、扶鸞を介して教理知識を吸収し、神々との相互関係を構築してきた。そうして人々は、自らの信仰心にめざめるプロセスをもたどってきたのである。本論は、こうした変化のプロ

セスをも解明していく。

本論の立場は、「宗教」を人間が普遍的に備え持つ知恵の一形態とみなし、その一般的な定義を求めるというものではない。人々の実践のなかで構築されていくものとして宗教をとらえなおし、この視点から、徳教の生成、存在の有りさまを記述していく。また、人々はどのような過程を経て、「宗教的」とみなされる知識に接近するのか、そうした知識がいかに外部世界と接合し、いかに運用されているのかにも注目しながら、宗教教団の展開、変容のプロセスをあくまでも人々の経験世界から捉えていく。

なお、移民と宗教の相互関係への考察として、ローカルな社会コンテクストにおいて、移民がいかなる状況下においてある宗教を選択するのか、また社会状況に合わせ、どのような修正や創出を行ってきたのかという、移民と宗教交渉というダイナミックな過程をとらえなおしていく。

以上のような考察を経て、本論が導き出した結論は次のとおりである。徳教は、扶鸞を教団の中心活動に据えると同時に、慈善や多様な文化社会活動をも展開し、包括的な性格を育ててきた。しかし、近年の教団の拡大に応じて、徳教のこうしたあいまいな性格がより浮き彫りになり、教団体制の完備化がきわめて緊急な課題となってきた。教団の変身が必要不可欠であるという認識は共有されているが、今後の方向性をめぐっては合意が達成できていない。実際に、扶鸞の是非や、宗教理論化の方途、そしてそもそも徳教が宗教であるかを問う論争が続いている。種々の言説が錯綜し、共通の認識が今もって形成されていない。様々なベクトルがぶつかりあい、今後の方向性を探る種々の試みがなされているなかで、理論強化に向かう徳教の教団イデオロギーの変容が促されている。

近年の徳教におけるこうした教団的展開と変容は、基本的に徳教信者たちの生活と思惑と密接に連動し、遂げられてきた。さらにいえば、徳教の教団形態は、華人大衆の生活スタイル、知識レベルに合わせてできたものであり、今日のいわば様々な欠陥をもつ徳教の教団スタイルは、徳教の担い手である人々のメンタリティをまさに如実に反映しているものである。つまり徳教は、商人を中心とする華人大衆の生き方そのものなのだ。彼らはそのおかれた社会環境や知識的制約のなかで、自らの理解から、自身の生活スタイルに見合う形で宗教信仰を再構築してきた。その結果として、今日の特殊な教団形態を有する徳教が生まれたのである。

商人階層と徳教のこのような関係は、移民と宗教のダイナミックな関係を物語る事例となる。徳教の現象は、移民が出自社会の伝統文化たる要素を選びとり、自らの生活環境に合わせて、独自の運用、創造を行うプロセスと捉えられる。こうした宗教信仰の新たな創出は、マレーシアのほか、ジンガポール、タイにおいても基本的には同じコンテクストにおいてなされている。各地の連携のネットワークが築かれるなか、徳教は東南アジアの華人社会におけるインター・リージョナルな現象にまでなっている。

さらに付け加えておくべき点がある。これまで人々は、複数の現実的な目的のもと徳教組織に参入しきたが、近年では実利的な神信仰中心のスタイルから、精神的なものへの追求という転換の兆しがみられる。この転換には、神々による託宣や、扶鸞を介して構築されてきた神々との相互関係が大きなファクターとして作用している。つまり、徳教の信者たちは、これまでのような扶鸞を介しての教理知識以外にも、自らの人生観、世界観に基づく知識を取り込んできた。こうした過程において、信者たちの精神的上昇志向が徐々に生じてきたのである。

今日、マレーシアをはじめとする東南アジア各国において、徳教関係者は、徳教の宗教理論化や、教団の新たな変身を目指し、様々な努力と試みを展開している。こうした動きは、人々の信仰の意識化、つまり自身の信仰をより可視化させるべく、今までのあいまいな教団の位置づけから脱却し、確たる教団イデオロギーを構築しようという志向性と連動したものなのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、徳教と呼ばれる、1930 年代に中国の広東省潮州地方で発生し、華人の移動とともに東南アジアに広まった民間宗教に関する研究であり、著者がマレーシアを中心に、シンガポールおよびタイでおこなった丸４年にわたるフィールドワークの成果である。母国中国では、共産党政権の成立後弾圧され衰退したのに対して、華人の移住先であるマレーシアでは、脱植民地期国民国家のマレー人優先という特有の政治・社会・文化的状況のもとで独自の発

展をとげた。徳教の教団指導者と信者の多数は、潮州系の商人である。他の民間宗教と同様、徳教は儒教・仏教・道教の混交宗教であり、現世利益を強く志向すると同時に、道徳的な修養団体としての側面ももつ。また、宗教性の中核をなすのは、扶鸞（フルアン）と呼ばれる託宣である。日本でいえばお筆先に相当するフルアンは、精霊憑依の一種であるが、霊媒はエクスタシーや脱魂の状態に陥ることなく、粛々と達筆で託宣を書く。その解釈には古典の教養が必要であり、フルアンには民間宗教とはいえ、中国の大伝統あるいはハイカルチャーの影響がみられ興味深い。本論文では、こうした徳教の実態と歴史的展開が、フィールド調査と文献調査に基づいて詳細に論じられている。文献調査に関しては、日本語と英語、および中国語で出版された徳教ほかの民間宗教に関する学術文献が網羅されているだけでなく、マレーシアとシンガポールで刊行された徳教教団の印刷物も丹念に収集され検討されている。さらに序章では、人類学における宗教研究および移民と宗教に関する研究のレヴューが、基礎的文献を駆使しつつ適確かつ簡潔におこなわれている。

徳教は、マレーシア以外でも信者を獲得し教団を拡大している。こうしたトランスナショナルなネットワークのあり方も本論文の重要な主題のひとつとなっている。本論文の空間的対象は、中国・香港から台湾、東南アジア各国、さらには近年徳教教団が設立されている、オーストラリア、ニュージーランド、アメリカ、カナダ、日本にまでおよぶ。時間的には、19 世紀末以降の中国における民間宗教の展開のなかに徳教が位置づけられているので、その射程は 100 年以上におよぶ。長期のインテンシヴなフィールドワークとエクステンシヴな文献調査に基づき、マレーシアにおける徳教の歴史と、トランスナショナルなネットワークの確立を含む現代的展開を詳細に論じた本論文は、華人宗教の研究、移民研究、東南アジア研究、トランスナショナリズム研究などの諸領域における重要な貢献である。なお、本論文は、21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」「トランスナショナリティ研究」プロジェクトの成果としても位置づけられることを申し添えておく。

以上のことから、博士（人間科学）の学位授与にふさわしいものと判断する。